

ジョージア語のことわざ

児島 康宏

1. 黒海とカスピ海にはさまれたコーカサス地方にジョージアという小さな国があります。ロシア、トルコ、アルメニア、アゼルバイジャンといった国々ととなり合っています。少し前まではグルジアと呼ばれていました。日本から遠く離れているので、あまりなじみがないかもしれませんが、それでも最近では日本でもジョージアについて少しずつ知られるようになってきたように思います。

お酒の好きな向きには、ジョージアと言えはなんといってもジョージアワインでしょう。すでに 8 千年前にジョージアでワインがつくられていたことを示す遺物が発見されており、ジョージアは「ワインのふるさと」だと考えられています。ジョージアを含むコーカサス地方一帯はブドウの原産地でもあります。

大昔からジョージアの人々は「クヴェヴリ」と呼ばれる大きな甕を使ってワインをつくってきました。今でも昔ながらの方法でジョージアじゅうでワインがつくられています。2013 年にはこの伝統的なワインの製法がユネスコの世界無形文化遺産に登録されました。ワインはジョージア人の日常と切っても切り離せません。冠婚葬祭はもちろんのこと、友人たちが集まれば必ずワインで乾杯をします。

そのため、ジョージアのことわざにはワインにまつわるものがたくさんあります。いくつか紹介しましょう。

ワインがないのに悪魔が革袋をなめず (ღვინო არსად იყო, ეშმაკები ტიკებს ალბობდნენო)
革袋はここではワインを入れる袋です。入れるべきワインがまだないのに入れものを用意するという意味で、つまり、日本語の「捕らぬ狸の皮算用」に相当することわざです。同じような趣旨のジョージアのことわざには「**まだ殺していない熊の皮を約束してはいけない**」 (ნუ დაპირდები იმ დათვის ტყავსა, რომელიც ჯერ არ მოგიკლავსო)、「**生まれぬうちから子にアブラムと名づける**」 (ჯერ ბავშვი არ დაბადებულიყო და აბრამს არქმევდნენო) などもあります。

なんでも新しいのが良いが、ワインと友人は古いのが良い

(ყველაფერი ახალია კარგი, ღვინო და მეგობარი — ძველი)

日本語には「畳と……」という言い回しがありますが、古いほうが良いものももちろんあって、ジョージアの人々の感覚ではその代表がワインと友人というわけです。友情が時とともにだんだん深まっていくように、ワインも時間をかけて熟成させるとより味わい深くなります。

ワインでもなければ水でもない (არც ღვინოა, არც წყალი)

できの悪いワインが、ワインとしての価値もなければ、水としても飲めないように、中途半端で何の役にも立たないものたとえです。日本語の「帯に短し襷(たすき)に長し」に近いことわざです。

水よりもワインに溺れる者のほうが多い (ღვინოში მეტი ხალხი იხრჩობა, ვიდრე წყალში)

いくらおいしくても飲みすぎて溺れてしまっは大変です。お酒はほどほどに。深酒を戒めることわざは他にもいろいろあります。

クヴェヴリの蓋を開けた者が多く (のワイン) を手に入れる

(ვინც მოხადა ქვევრიო, იმას ერგო ზევრიო)

最初にものごとを始めた者が最も大きな利益を得るというたとえです。大きな甕「クヴェヴリ」を地中に埋め、その中に搾ったブドウの果汁を皮や種ごとに入れておくと、自然と発酵が始まります。発酵が終わった後、口を密閉してしばらく寝かせればワインの完成です。クヴェヴリを開けるのもひとつのイベントで、何かのお祝いごとや特別な客を迎えたときなどにしばしばクヴェヴリを開けます。



小さなものから人が楽に入れるような大きなものまで大小さまざまのクヴェヴリがある



たくさんのクヴェヴリが埋められたワイナリーの床

一匹の鼠が九つのクヴェヴリを台無しにした (ერთმა თავემა ცხრა ქვევრი წაბილწათ)

鼠が一匹でもクヴェヴリの中に落ちればワインがだめになってしまいますから、小さなもの、些細なことが大きな損害をもたらすたとえです。九という数は、必ずしも文字通り九つではなく、漠然と数が多いことを表しています。

古いクヴェヴリは良いワインを保存する (ძველი ქვევრი კარგ ღვინოს ინახავს)

新しいクヴェヴリよりも、長い間使いこまれたもののほうがよくワインを保存する、つまり、年季の入ったもののほうがよい働きをすることのたとえです。上に、「ワインと友人は古いのが良い」ということわざがありましたが、クヴェヴリにも同じことが言えるようです。

クヴェヴリの中に坐っている (ჭურბოში ზის)

ちょうど「井の中の蛙」に相当する表現で、周囲で何が起きているのか知らない、世事に疎い、見識が狭く後れているというような意味を表す表現です。地面の下という点は共通していますが、坐っているのが井戸の中ではなく、地中に埋めたクヴェヴリの中というのがいかにもジョージアらしいところです。

メリキペが自分をタマダだと思ふ (მერიკიძეებს თავი თამადა ეგონათ)

ジョージアの酒宴には一定の決まりごとがあります。まず最初に、「タマダ」と呼ばれる、その場を仕切る人を全員で選びます。タマダの最も重要な役目は、何に乾杯するのかを決めることです。ジョージアではワインを飲むときに必ず何かに杯を捧げます。ただ黙々とワインを飲むことはありません。神様に、平和に、友情に、愛に……いろいろなものや人への乾杯が何度も繰り返されます。

一方、宴席でワインを人々に注いでタマダを補佐する人が「メリキペ」です。つまり、「メリキペが自分をタマダだと思ふ」ということわざは、補佐する役目の者が思い上って出しゃばることのたとえです。

ちなみに、宴会となれば、テーブルの上にとっても食べ切れないほどの料理を所狭しと並べるのがジョージア式です。いろんな料理が並んださまは、「欠けているのは小鳥の乳だけ」(ჩიტის რძეს აკლია) あるいは「小鳥の乳までそろっている」(ჩიტის რძეც არ აკლია) と表現されます。

以上のように、ジョージアでは日常のさまざまな状況を頻繁にワインに関連づけて表現します。大昔からワインとともに暮らしてきた人々ならではですね。

2. ワインにはパンがつきものです。ジョージアは基本的にキリスト教の文化なので、ワインとパンはキリストの血と肉を象徴するものでもあります。

客にふるまう食事を一般に「**パンと塩**」(პურ-მარილი) と呼びます。「**抜かれた剣をパンと塩が収めた**」(ამოდებული ხმალი პურ-მარილმა ჩააგმო) ということわざもあります。けんか腰でやってきた客も食事でもてなしたら冷静になった、つまり、人は腹が満たされれば怒りも収まるものだという表現です。「**古いパンと塩は失われない**」(ძველი პურ-მარილი არ დაიკარგება) は、一度人を手厚くもてなせばいつか必ず良い報いが返ってくるというような意味です。

ジョージアの人々は客をもてなすことをとても大切に考えます。「**客は神様の遣い**」

(სტუმარი ღვთისაა)、「客に來れば犬でも外に追い出されない」(სტუმარი ძაღლიც არ გაიგდება გარეთო) などと言われます。

パンにまつわることわざにもいろいろなものがあります。いくつか挙げましょう。「裂いたパンはもとに戻らない」(გატეხილი პური აღარ გამთელდებაო) は日本語の「覆水盆に返らず」に相当します。「パンはパン焼き職人に焼かせろ」(პური მეპურეს გამოაცხოზინეო) は、いわゆる「餅は餅屋」と同じで、仕事はそれを専門とする人に任せたほうがよいという表現です。伝統的なパンは窯の内側の壁に生地をはりつけて焼きます。「パン窯が熱いうちにパンをはりつけろ」(სანამ თონე ცხელია, პური მანამ ჩააკარიო) は「鉄は熱いうちに打て」に似たことわざで、何かを行なうには好機を逃してはならないという意味です。「すべてのパンが同じパン窯で焼かれるわけではない」(ყველა პური ერთ თონეში არ გამოცხვებაო) は、十人十色、いろいろな人がいるものだというような趣旨のことわざです。



パン窯の内側の壁にパン生地をはりつけて焼きます



ムチャディ (とうもろこしのパン)

「イメレティの人がムチャディの名前を忘れた」(იმერელს მჭადის სახელი დაავიწყდაო) のムチャディはとうもろこしのパンで、とくにジョージア西部でよく食べられます。ジョージア西部の一地方、イメレティの人がいつも食べ慣れているムチャディの名前を忘れるというのは、当然知っているはずのものの名前を度忘れすることのたとえです。普段の会話の中でも、なじみ深いものの名前がとっさに思い出せないときに、「ムチャディの名前を忘れてしまった！」などと言ったりします。

3. もちろん、ワインやパンに関するものに限らず、ジョージア語にはさまざまなことわざがあります。とくによく使われるものをいくつか挙げてみましょう。

「十回測ってから一度切れ」(ათჯერ გაზომე და ერთხელ გაჭერიო)、「わざわざの中には有益なものもある」(ზოგი ჭირი მარგებელიაო)、「急ぐ者は遅れる」(მოჩქარეს მოუგვიანდესო)

のような人生訓はおそらく世界のどこでも同じですね。

「一つのハシバミの実を九人の兄弟が分け合った」(ერთი თხილის გული ცხრა ძმამ გაიყო) は、わずかなものでも誰かが独り占めしたりせず、仲良く分け合うたとえです。人々が協力し合うよう説く「力は団結にあり」(ძალა ერთობაშია) もよく使われる言い回しで、ジョージアの国章に書かれています。



ジョージアの国章

「犬のいない国では猫を吠えさせる」(უძალლო ქვეყანაში კატებს აყეფებდნენ) は、何かの役目を果たすべき適任者がいない場合に、不適任な別の誰かがその代わりを務めることのたとえです。ちなみに、「猫と犬」(კატა და ძალი) は、日本語の「犬猿の仲」のように、仲が悪いものの代表とされています。犬が登場することわざには他にたとえば、「犬と言ったら棒手に取れ」(ძალი ახსენე და ჯობი დაიჭირე) があります。犬という言葉をお口にしたら犬が現れるから追いつく用意をしろという意味で、いわゆる「噂をすれば影」と同じ趣旨のことわざです。一方、猫のことわざでは、「ネズミが(土を)掘り続けて、猫を掘り出した」(თაგვმა თხარა, თხარა და კატა გამოთხარა) が頻繁に聞かれます。これは「藪をつついて蛇を出す」に似たことわざで、何かをやり過ぎて自らわざわいを招くたとえです。

多くのジョージア語のことわざは、文字通りの意味が分かれば、そのことわざの意味するところがおのずと理解されるでしょう。たとえば、「どこへ行ってもその帽子をかぶれ」(სადაც მიხვალ, იქაური ქუდი დაიხურე) は、いわゆる「郷に入ったら郷に従え」に相当することわざです。「司祭も聖歌を間違え」(ერთი ალილო მღვდელსაც შესცდებამ) は「弘法も筆の誤り」と同じです。「海もスプーンで空になる」(ზღვაც დაილევა კოვზითაო) というのは、少しずつスプーンですくっていけば海もいつかは空っぽになるという意味で、「塵も積もれば山となる」に当たることわざだとすぐに見当がつくはずですが、こういったことわざを見ると、文化がまったく違っても人間の感覚や感性は変わらないことがよく分かります。

一方、「嘘は足が短い」(ტყუილს მოკლე ფეხები აქვს) などは少々説明が必要でしょう。これは、嘘はすぐにばれるものだという意味のことわざです。同じく擬人化を含んだ「注意深さは頭が痛くない」(სიფრთხილეს თავი არსტკივამ) は、軽率な行動を戒め、注意深くふるまうよう諭す表現です。「注意深い人は……」ではなく、「注意深さは……」なのがちょっと不思議ですが、やはりよく使われることわざです。「風が運んできたものを風が運び去る」(ქარის მოტანილს ქარი წაიღებს) はいわゆる「悪銭身につかず」に相当することわざで、楽をして得たものはすぐに失ってしまうという意味です。あるいは、「愛し合う夫婦は斧の柄の上で眠る」(მოსიყვარულე ცოლ-ქმარი ცულის ტარზე დაიძინებს) は、夫婦の仲睦まじさを表す表現で、ここでは「斧の柄」はいわば日本語の「猫の額」と同じでとても狭い場所のたとえです。

故事成語のように、何らかのエピソードをもとにしたことわざは、もとの話を知らないとなかなか意味を理解しがたいものです。たとえば、非常によく使われることわざに、「**誓いは信じるが、尻尾には驚かされる**」(ფიცი მწამს, ბოლო მაკვირვებს)があります。これだけでは何のことかさっぱり分かりませんが、「神に誓って鶏を盗んでいない」と言う鶏泥棒の服の裾から、ふところに隠した鶏の尻尾が見えていたという話が下敷きになったことわざで、あからさまな嘘を言い張るたとえです。政治家どうしの討論番組などを見ているとしょっちゅうお互いに言い合っています。

「**吠えても鳴いても村はできない**」(ყვეთა და ყვილით სოფელი არ აშენდება)は、何かを成し遂げようと望むならそれにふさわしい努力をしないといけないというような意味です。これは、動物たちが集まって村をつくらうとしたけれど、犬は吠え、鶏は鳴くばかりで何もせず、一向に村ができなかったという寓話から生まれたことわざです。

4. ジョージアの古典の一節がことわざのように用いられることもしばしばあります。とくによく引用されるのは、12世紀末に書かれた長大な叙事詩「豹皮の騎士」です。アラブの将軍アフタンディルが「豹皮の騎士」ことインドの王子タリエルのために、さらわれた王女を捜し、最後には力を合わせて救い出すという友情や愛を讃える物語です。物語はアラブの王様が一人娘の王女に王座を譲ることを大臣たちに諮る場面から始まります。意見を求められた大臣たちは王様に、「**雌であれ雄であれ獅子の子は獅子**」(ლეკვი ლომისა სწორია, ძუ იყოს თუნდა ხვადია)と答えます。すなわち、王女は女性ですが、男性と変わらず、王となるにふさわしいというわけです。その後、王座を譲った王様は娘に「(人に) **与えた物はお前の物、与えなければ失われる**」(რასაც ვასცემ შენია, რაც არა დაკარგულია)と帝王学を説きます。富を惜しまず人々に分け与えればみな味方となり自分に返ってくるが、富をしまっておくだけでは失われたも同然だというような意味です。どちらの言い回しも広く知られています。

ほかにも、「**友を探さぬ者は己の敵**」(ვინ მოყვარესა არ ეძებს, იგი თავისა მტერია)、「**恥ずべき生より名誉ある死**」(სჯობს სიცოცხლესა ნაძრახსა სიკვდილი სახელოვანი)、「**とげ**(に刺されること) **なくバラを摘んだ者はいない**」(ვარდნი უეკლოდ არავის მოუკრებიან)など、「豹皮の騎士」は時代を越えた真理を表す格言の宝庫です。

叙事詩の冒頭で作者ルスタヴェリは詩を讃えて、「長い言葉を短く言う、だからこそ詩は素晴らしい」と述べます。これはまさにことわざにも当てはまるものです。ことわざも、あえて説明しようとするれば長い言葉を必要とする内容を簡潔にひと言で表した一種の詩のようなものだと言えるでしょう。ジョージアの人々はこうしたことわざを好んで使いますが、ジョージアに限らず、ことわざが愛され、よく使われる理由もまさにここにあるのだと思われます。